＊湘南遺産プロジェクトHP＊

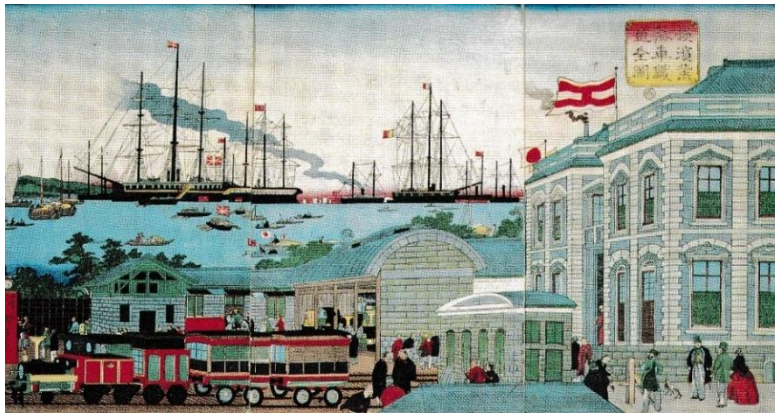
湘南の由来
ショートショート
第5話-1

“湘南”という地域呼称はどこから来たのか？ その疑問に迫るショートショートの第5話

えと文　和田精二　2021,06,20

5-1 明治に 動き出した“湘南”呼称

明治を待っていたかのように “湘南”呼称が 雨後の竹の子よろしく 顔を出す。
出て来たところは 海水浴場や別荘地など 海沿いのエリア。
文明開化の波に乗って 海沿いに列車が疾走し 水着姿の男女が海へ繰り出す。
“中国伝来・文人趣味の湘南”から “西洋文化追随・ハイカラ趣味の湘南”へ
“湘南”がダイナミックにイメージを変えていく。

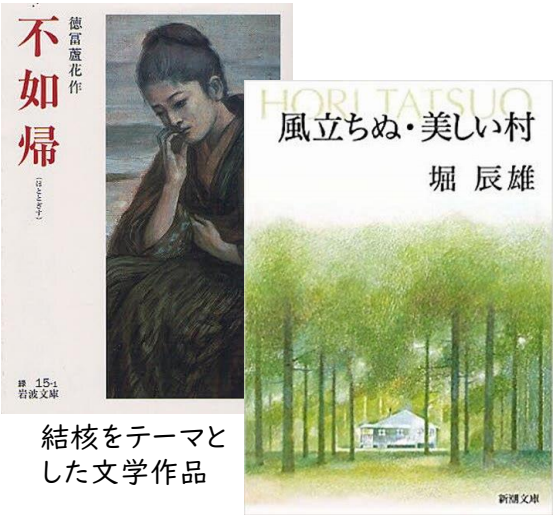


横浜浮世絵に西欧文化に追随する時代の空気が窺える

明治は文明開化とともにやって来た。

と言うと、明るい時代の到来に聞こえるが、実際には、欧米列強の植民地支配を免れるために近代化を強引に推し進めた時代とも言える。

目的達成のためなら日本の伝統文化を無視し
西洋文化なら何でもよいという考えすら出て来た
時代でもあった。



結核をテーマとした文学作品

もうひとつ、文明開化とともにやって来たのが、不治の病、死の病と恐れられた“結核”。

産業革命後、英国で大流行した結核は、英国発の産業革命とともに世界各国に広がり、日本にもやって来た。

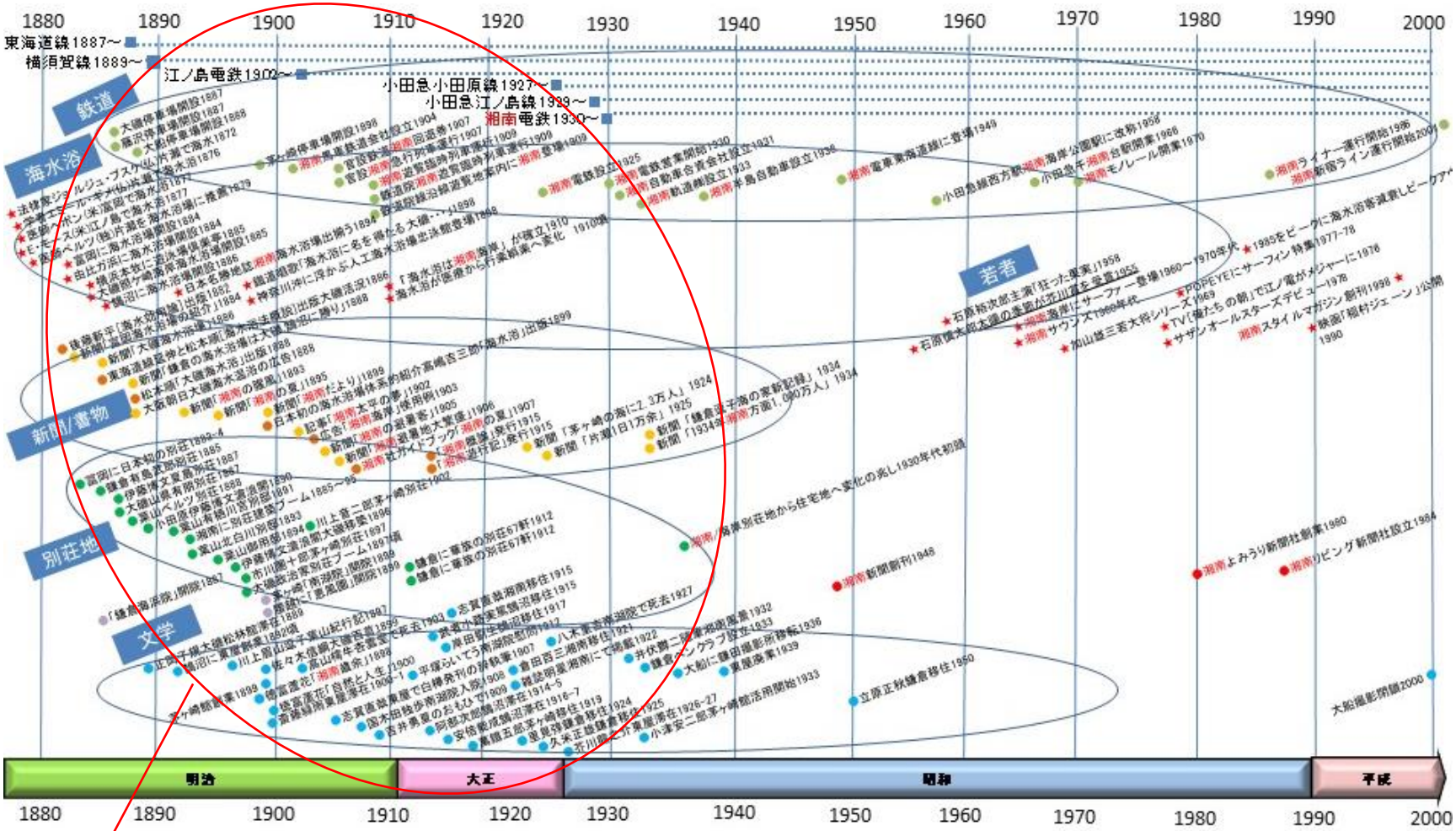
この“結核”の到来も“湘南”と切り離せない史実のひとつとなる。

鉄路がひろげる“湘南”

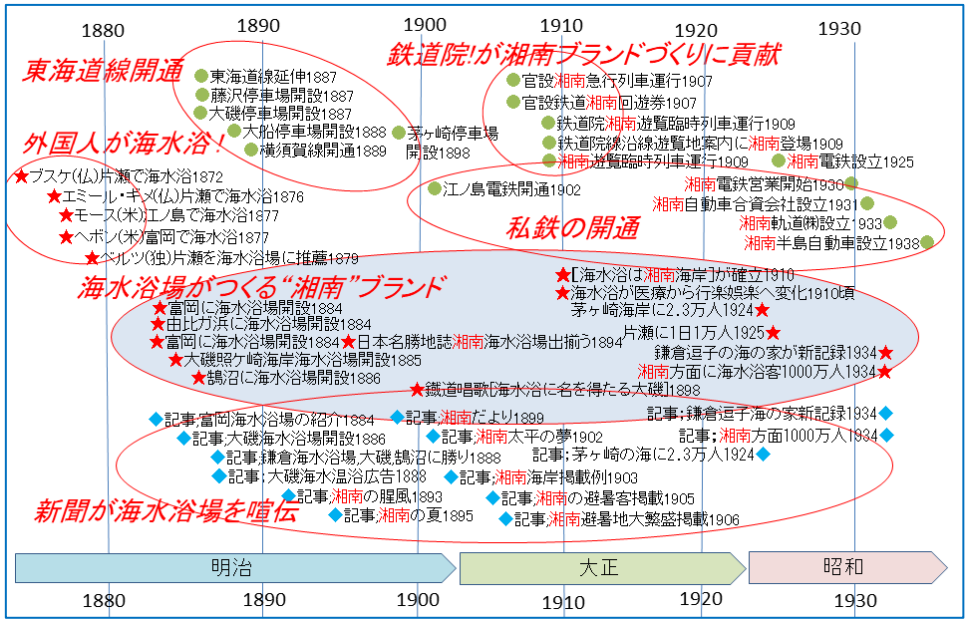
西洋からやって来た文明開化の波が“湘南”という地域呼称に何らかの影響を与えたのかどうかが今回のテーマ。

今回も“湘南”を扱った文献から“湘南”呼称の関連事項をひろいあげて 年表をつくってみる。

結果的に、短期的な動きが見える【年表A（No164）】と長期的な動きが見える【年表B（次回報告）】に分かれた。



明治から大正にかけての短期的な動きが見えて来る【年表 A】



【年表A】で 明治から大正にかけて増えた言葉を群化してみた結果、

増えた言葉は“海水浴”,“別荘”,“避暑”,“鉄道”,“停車場”,“文学”,“湘南” など。

そこで“海水浴”,“鉄道”に新聞関連の記事を加えて並べ替えたのが左の表。

明治になって 増えた言葉の群は･･･

164【年表A】と165の表から見えて来ることは、

1，“海水浴”を軸に “鉄道”,“別荘地”,“新聞”,“文学”などが絡みながら展開。

2，“鉄道”と“新聞”の群に “湘南”を冠した呼称が出現。

3，官設鉄道が “湘南周遊券”や“湘南急行列車”など、“湘南”ブランド作戦を推進。

4，新聞に “湘南海岸”,“湘南の夏”,“湘南の避暑客”など “湘南”を強調する記事が増加。

1960年前後の茅ヶ崎海岸

昭和60(1985)年にピークアウトするまで、“海水浴”は日本人家族の夏の娯楽の最大イベントであり、国民的な行事だった。

明治32年の“海水浴場案内”では、神奈川17、静岡5、茨城1という様に 神奈川県の海水浴場数が圧倒的に多い。

その“海水浴” と“湘南”呼称が大きく関わっているため、最初に“海水浴”と“湘南”の関係を見ておきたい。

大野の汐湯治　出典：大野町史（岐阜県）

明治に入ると 富国強兵が叫ばれ 国民の体力向上、健康の増進が求められた。

しかし、身体的なひ弱さに加え、コレラなどの伝染病に対し無防備な状態にあったのが当時の日本。

そうした中、西欧から海浜を活用した健康増進法の“海水浴”が伝わり、関心が高まっていく。

松本良順と長与専斎

我が国にも“潮湯治” など民間療法があったが、西欧を見習いながら“近代海水浴”への脱皮に情熱を傾ける医者が現れ始める。

代表的な人物が “長与専斎”、“松本良順”、“後藤新平”。

彼らが 海水浴による身体づくり運動に注力した結果、明治18(1885)年以降、“海水浴” の効果が広く喧伝され、全国的に波及していく。

3人のうちの“長与”と“松本”が“湘南”の海水浴場の開設に大きく貢献する。

剃髪、帯刀姿の松本良順
戊辰戦争時の姿と思われる

松本良順（後に順に改名） 天保3(1832)年～明治40(1907)年

蘭学医佐藤泰然の次男として生まれ、のち幕府医官松本良甫の養子となる。

安政4(1857)年幕命で長崎へ留学、蘭医ポンペについて西洋医術を学び、文久1(1861)年創立の長崎養成所でポンペを助けて教育と臨床にあたる。

同3年 江戸に帰り、緒方洪庵の後を継ぎ幕府の西洋医学所の頭取となる。徳川将軍家茂を看取り、新選組の近藤、土方と懇意にし、戊辰戦争では会津城内に野戦病院を設けて奮闘、賊軍に組したものとして投獄される。

ポンペは解剖学・病理学・薬理学などの基礎教育から内科・外科などの臨床教育まで 5年間指導して帰国した

釈放後、早稲田に帝都初の病院/医学塾を開院、治療と教育を行う。

明治4(1871)年、山縣有朋の推薦で初代陸軍軍医総監に就任。
同12(1879)年の総監退任後は、地方病の調査と治療に精力を注ぐ。

高価な輸入薬よりも庶民に対応可能な治療法の確立が大事と考え、過去の治療実績からリュウマチ等に効果があった“海水浴”に注目、“海水浴場好適地十か条”をつくり、全国の調査を行う。

171

松本が著した“海水浴法概説”

明治17(1884)年、大磯との運命的な出会いがやって来る。

同年、海水浴の効用と海水浴場開設を説くため小田原に赴くが無視される。

意気消沈した帰路立ち寄った大磯で 医学塾門下生に海岸を案内された際、照ヶ崎海岸が“海水浴”の適地であることを発見。

大磯宿の宿場経済に依存していた大磯は、明治維新で大打撃を受け、町の財政がひっ迫、海水浴場の開設は渡りに船の機会となる。

172

新富座は京橋区新富町にあった歌舞伎劇場。虎御前は曽我兄弟の仇討ちを描いた曽我物語の登場人物で実在とされる

明治18(1885)年、満を持して照ヶ崎海岸海水浴場を開場するが客数が伸びず散々な結果に終わる。

しかし、2年後の東海道線横浜～国府津間の延伸で大磯駅が開場し、海水浴旅館“禱龍館（とうりゅうかん）”が開館すると、松本の著作“海水浴法概説”の出版も後押しして客数が増加、大磯に賑わいが戻る。

出版に続く松本の宣伝作戦の第2弾は、河竹黙阿弥脚本、大磯ゆかりの“虎御前恋物語”の東京新富座公演。

錦絵（浮世絵）“禱龍館”繁栄の図”の一部

歌舞伎役者　尾上菊五郎、中村歌右衛門、市川左団次が演じた演目が成功し評判となる。

翌年、第3弾として、保養施設　“禱龍館　繁栄之図”の錦絵（浮世絵）を制作、大磯の“海水浴場”を広く喧伝する。

こうした広告戦略により“大磯”と共に“海水浴”という概念が東京中に広まっていく。

長崎精得館長時代の長与専斎

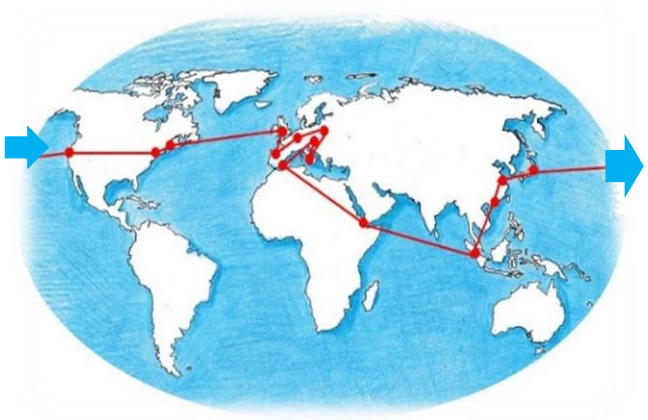
●長与専斎　天保9(1838)年～明治35(1902)年

肥前大村藩の漢方医長与中庵の子として生まれる。

後に近代海水浴普及に注力する緒方洪庵の蘭学塾に入塾。
洪庵からポンペの医学伝習所(後の長崎養成所)の入所を勧められる。

文久元年(1861)入所、ポンペの助手を務める“松本良順”と出会う。

養成所で西洋医学を修めた後、長崎精得館医師頭取に就任、
維新後は同館(現長崎大学医学部)の学頭に就任。

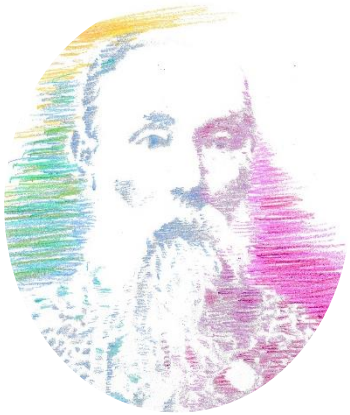


岩倉使節団の1年11か月に渡る視察順路

明治維新後文部省に入省、明治4(1987)年岩倉視察団の
一員に加わり 欧米を見て回る。

視察中、国民の健康管理を司る組織の存在を知って衝撃を
受け、将来的にこの任務に当たることを決意。

英国ブライトンで“海水浴”の現場を見学、海水浴の
提唱者ラッセルから海水浴療法を直接学ぶ。



帰国後、文部省医務局長を務めた後、内務省に異動、初代衛生局長に就任。
これ以降、日本の衛生制度が発展していく。

明治10(1877)年以降、“長与”は各地で海水浴の効用を説き、“海水浴場”の開設を勧めて回る。

官報に掲載された特集“海水浴説”は、“海水浴”を公に取り上げた第1号となる。

“衛生”という用語は長与がつくった

177

明治17年、“長与”が海水浴場の好適地と説いた鎌倉由比ガ浜に“海水浴場”が開場する。

その2年後、同地に我が国初の“海水浴”を取りいれた結核療養所“鎌倉海浜院”が開院、“長与”が理想とした英国モデルがそっくりそのまま実現する。

“長与”の背中を押したのは医学教育の指導で来日していたドイツ人医師 の“ベルツ”。

鎌倉海浜院は鎌倉海浜ホテルに業態を変える

178

ベルツ

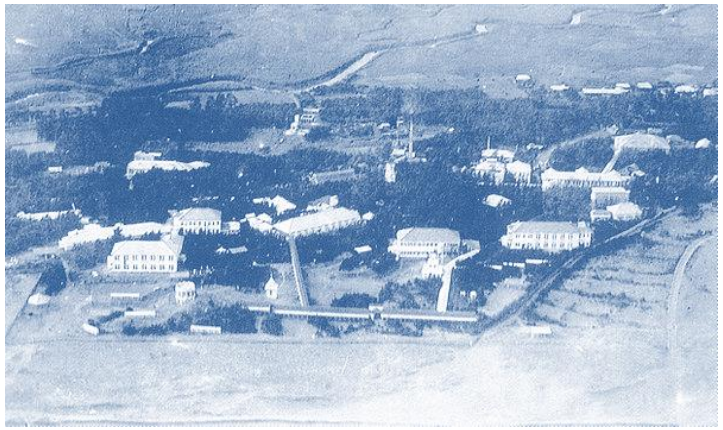
ベルツの弟子に 南湖院の高田畊安、平塚杏雲堂の二代目佐々木政吉がいる

“ベルツ”は 日本の“結核”の惨状に注目し、結核療養所（サナトリウム）の適地として海浜を推奨したため、日本では“湘南”や“須磨” の海浜からサナトリウムが始まる。

“結核”は明治から昭和にかけて猛威をふるい、病死原因の第1位。
死亡率も10万対200 以上の状態が昭和20(1945)年まで続く。

結核治療薬の登場は戦後まで待たねばならず、それまでは“大気・栄養・安静”による“サナトリウム”療法に限られていた。
（その後、“大気・栄養・小運動” は“大気・栄養・安静”に改善される）

179



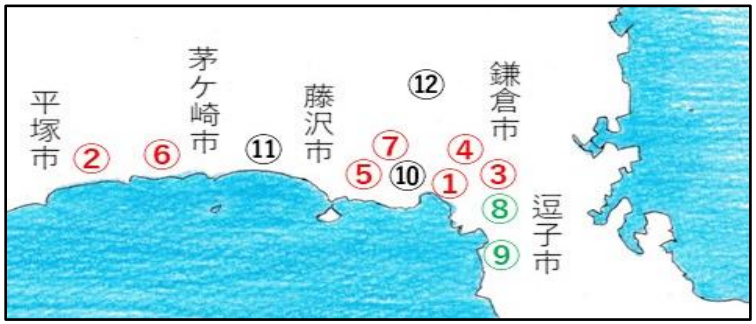
茅ケ崎南湖院の療養施設は東洋一の規模を誇った

“長与”が傾注した“鎌倉海浜院”は上流階級を対象としながら費用設定に無理があり２年で経営破綻する。

施設は経営者が代わり“鎌倉海浜ホテル”として再出発、長与の理想はついえる。

しかし“鎌倉海浜院”の閉院後、明治25年に“鎌倉養生院”、同30年に“杏雲堂平塚分院”、同32年に“南湖院”が開設され、最盛時には１2の“サナトリウム”が“湘南”エリアに集中することになる。

180



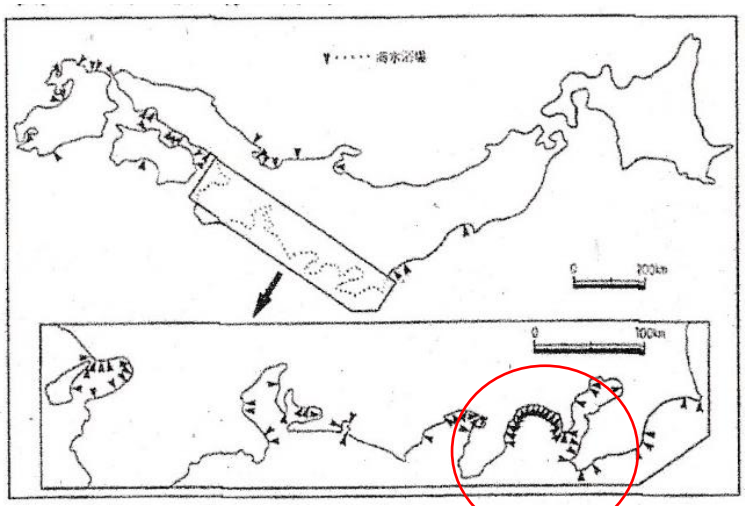
湘南エリアのサナトリウム

①鎌倉海浜院（鎌倉）明治19
②杏雲堂平塚病院（平塚）明治29
③鎌倉養生院（鎌倉）明治30
④鎌倉病院（鎌倉）明治32
⑤中村恵風園療養所（鎌倉）明治32
⑥南湖院（茅ヶ崎）明治32
⑦鈴木療養所（鎌倉）明治44
⑧額田保養院（鎌倉）大正9
⑨湘南サナトリウム（逗子）大正15
⑩聖テレジア七里ガ浜療養所（鎌倉）昭和4
⑪長谷川病院（藤沢） 昭和07
⑫林間病院 昭和8

結果的に“長与”の理想は湘南の海岸に根付くことになる。

その後、日本のサナトリウムは那須や清瀬など、内陸部に建設されていく。

清瀬ではサナトリウム建設に対する大規模な反対運動が起きるが“湘南”ではそこまでの例は少ない。



海水浴場が集中した相模湾沿岸部（小口、1910）

左図は明治43(1910)年の“海水浴場”を表しているが、圧倒的に“湘南”を中心とした相模湾沿岸に多い。

観光地開発を考えれば“湘南”にとってサナトリウムの建設は大きな障害となったはず。

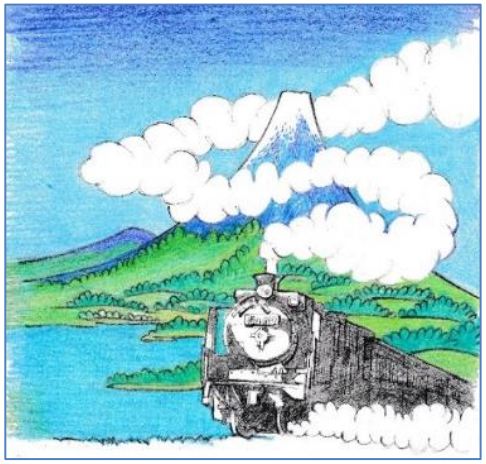
ところが、“湘南”ほど広域にわたり海水浴場とサナトリウムが共存した地域は国内に見当たらない。

ベストセラー“自然と人生”を著した徳富蘆花

“湘南”という地域呼称が全国に認知された最初は“徳富蘆花”の“自然と人生”の大ベストセラーにあった。

この蘆花ブームと相前後して、行楽地、避暑地としての湘南への誘致が鉄道院により開始され、“湘南”の地域呼称の全国認知が決定的となる。

183



鉄道院が“湘南”海浜プランと富士登山プラン発売

明治36(1903)年、鉄道院鉄道作業局は東海道線を対象に相模湾沿いの地域を“湘南”と呼称し大々的なキャンペーンを開始する。

夏の行楽客のために 新橋・横浜駅からの“湘南海浜行き”乗車券 や“富士登山”乗車券の 往復割引を実施したり、

新橋から湘南 までノンストップの“湘南急行列車”や“湘南”全駅に各1回乗降できる“湘南回遊券”の発売などを実施する。

このキャンペーンは一般紙にも広告として掲載され広く喧伝される。

184

明治32年頃の茅ヶ崎駅。1日の乗降客は500人程度

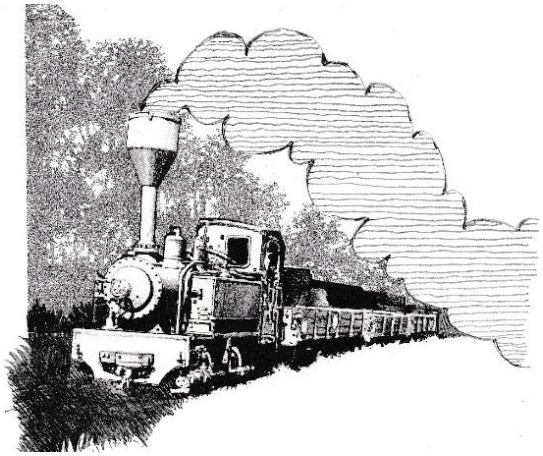
鉄道院が“湘南”の駅として掲げたのは、
横須賀、逗子、鎌倉、藤沢、茅ケ崎、平塚、大磯、二の宮、国府津の各駅。

その結果、対象地域の総称として“湘南”呼称が認知され、同時に、
横須賀から小田原までを“湘南”とする社会的合意が成立していく。

明治36年のキャンペーン以降、相模川以西に“湘南”を冠した企業が
増えたのがその証と思われる。

たとえば、

185



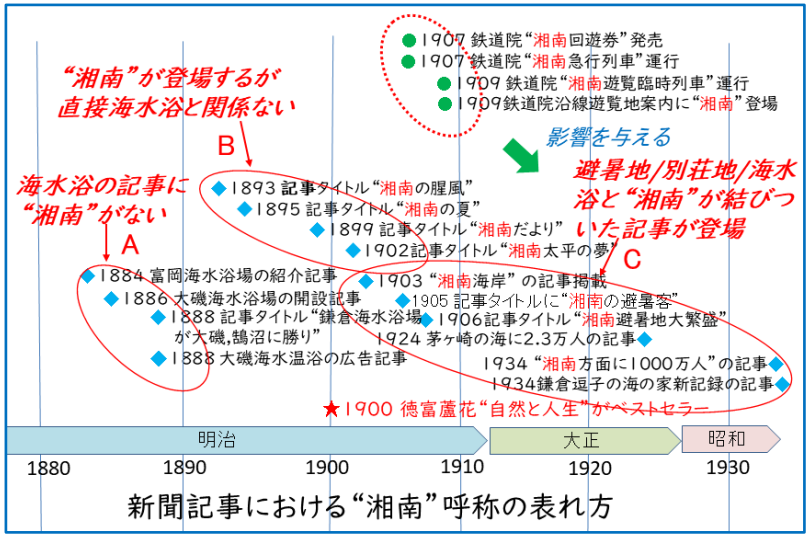
明治39年、二宮、秦野間を走った“湘南馬車鉄道”

二宮地区には、
明治37年、湘南馬車鉄道が設立され（同39年開業）、
明治41年、湘南牛乳株式会社が創業、

小田原地区には、
明治40年、湘南煙草合名会社、
明治44年、湘南度量衡器製作株式会社、
明治45年、湘南介立社の創立　などがあげられる。

小田原も横須賀同様に“湘南”呼称が地域に根付いていた
ことが窺える。

186



新聞記事における“湘南”呼称の表れ方

一方、いつごろから“新聞”に“湘南”呼称が現れたのか。記事の内容から確認してみる。

明治17年から海水浴場開場の記事が登場するが、まだ“湘南”という地域呼称は使われていない。A

明治25年から“湘南”呼称が登場するが、海水浴や避暑地と直接関係ない記事である。B

明治35年から、海水浴、別荘地等と絡んだ記事として“湘南”呼称が登場する。C

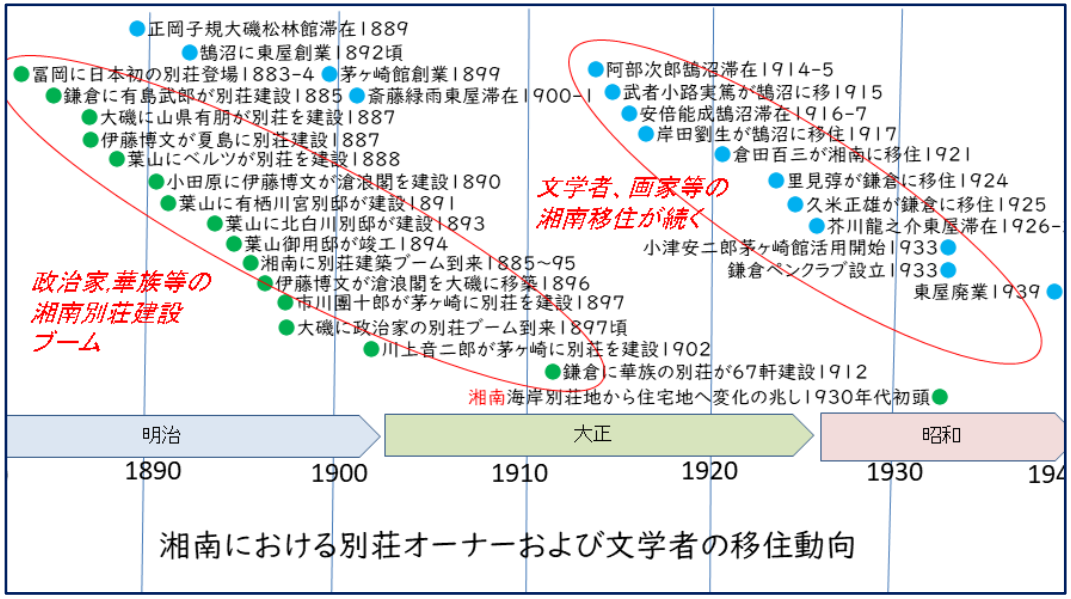
鉄道院が設定した“湘南”エリアと平成26年神奈川県“feel SHONAN/三浦から湯河原まで”のメッセージが重なって来る

以上から、

明治末の新聞から海水浴、避暑地等の記事で“湘南”呼称が登場するが、あきらかに鉄道院のキャンペーンが効いている、

新聞と鉄道は持ちつ持たれつの関係で“湘南”呼称を広めて来たことが理解できる。

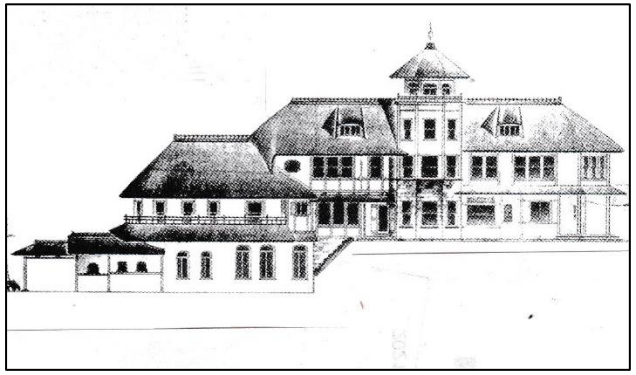
加えて、昭和のある時代までは、相模湾全体を“湘南”と称していたことも推定できる。



言葉の群にある“別荘”と“文学”の動向を年表にする。

明治10年代の別荘は、富岡や金沢など東京湾岸に集中していたが、明治20年の東海道線の延伸により状況が一変する。

東京、横浜からの利便性が向上すると、鉄道院の“湘南”キャンペーンも功を奏し、“湘南”に対する関心が一挙に高まる。



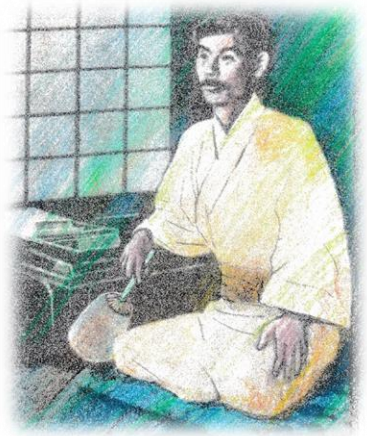
大磯の城山荘本館は三井八郎右衛門高棟が建築家久米権九郎に設計依頼した木造耐震建造の建築物。現存していない。

“松本”が大磯に別荘をもつと他の政治家も“湘南”に集まり出す。

明治～大正の歴代首相全員が“湘南”に本邸や別荘を所有し、三井、三菱、安田などの財閥系の別荘も湘南に別荘を構える。

天皇家の御用邸が葉山・鎌倉・小田原に置かれ、その周囲に皇族・華族・軍人・政治家の別荘が建てられる。

こうした“別荘地” の動向と同時進行のかたちで“海水浴”や“鉄道”,“新聞”,“文学”が展開したのが【年表A】から読み取れる。



南湖院にて37歳で没した独歩

最後に“湘南の文学”について引用。

『湘南の作家や画家など文化人の物語の多くは、結核の療養と何らかのかかわりがあると言える。木下利玄（鎌倉）、吉野秀雄（鎌倉）、岸田劉生（鵠沼）、萬鉄五郎（茅ヶ崎）、国木田独歩（茅ヶ崎）、八木重吉（茅ヶ崎）、有島安子（平塚）、高山樗牛（鎌倉・大磯・平塚）、彼らはすべて結核に羅患しており（あるいは、その疑いがあって）、結核の療養に効果的な土地として湘南との縁が選ばれていると言える。明治から大正期にかけて湘南の海岸線は結核の療養地であることにによって、一つの文化を生み出したとも言える。』 海辺の憩い/湘南別荘物語,島本千也

“湘南”から思いつく “海水浴” ,“避暑地”,“別荘地”などは、“湘南”を強く社会にイメージづけた要素であるが、言うまでもなくこれらは“文明開化”と共にやって来た近代の産物である。

明治以降、ハイカラに遊びハイカラに暮らす“湘南”の地域イメージがつくられた上に戦後の太陽族、加山雄三、グループサウンズなどによる夏の明るい海浜イメージが上塗りされていったのが一般的な“湘南”像と考えられる。

しかし、こうした近代の産物だけで“湘南”を見るのはやや皮相的すぎるように思える。もっと“湘南”を深掘りしていくと、別の“湘南”の魅力が見えて来るかもしれない。

【参考23】 横浜浮世絵（横浜絵、横浜錦絵とも言う）

開港1ケ月で数百人の外国人が来往、貿易業者は百軒を超し、居住宅数三千に及び、異国情緒溢れる港町が出現

“浮世絵”と呼ばれる木版画は長崎や横浜など江戸以外でも独特の版画が板行されたが、横浜でも港町ヨコハマを舞台に幕末から明治初期にかけて製作された。

“横浜浮世絵”は江戸伝来のものとは異なり、開港に伴い入って来た外国人や異国の風俗習慣などを画題として用いた。

その数800余種、万延から文久年間にかけての数年間が最も作品が多く、全体の80%がこの時期に板行されている。

浮世絵師約50人も板元（問屋）約80余軒もその殆どが江戸から来ており、地元横浜の版元は数軒に過ぎない。

【参考24】サナトリウム

19世紀に英国で始まりドイツで発達したサナトリウム療法は、新鮮な空気、栄養にある程度の運動を行うことで結核を克服する療法として出発したが、ドイツのデットワイラーが自らの体験から大気・栄養・安静を主軸とするサナトリウム療法に改善し完成させた。その後、スイスのダボスのような空気の清浄な山岳地方に多くのサナトリウムが建設された。

湘南エリアのサナトリウムはいずれも私立であったために入院費も高く庶民の結核患者にとっては高根の花とされ、“湘南海岸のサナトリウムは最高で最後の希望の地”と言われた。

大正8（1919）年、庶民の患者を救済するために結核予防法が制定され、人口5万人以上の市に結核療養所の設置が義務付けられてからは、公立の施設が急速に増えた。

公立の施設として、江古田に続き清瀬に東京府立清瀬病院が建てられた。
当時、結核は差別と偏見の対象であり、どこでも療養所の設置に対し地元の反対運動が起り、清瀬も例外ではなかった。しかし、昭和大不況や広大な雑木林の地主の了解が得られたこともあり、清瀬には昭和6年から同29年までに18の結核療養施設が建てられた。

【参考25】鎌倉海浜院➔鎌倉海浜ホテル

鎌倉海浜院ホテルの絵葉書

“鎌倉海浜院”は、木造2階建て，室数30でスタート。経営破綻後、“鎌倉海浜ホテル”として営業、明治30年、ジョサイア・コンドル設計の増改築を実施した。

大正5年、明治屋磯野長城が買収し“鎌倉海浜ホテル”となった後は、ロシア革命の影響で旅客が増え商売が繁盛し、大正9年に24室を増設する。

太平洋戦争末期には海軍省の斡旋でドイツ大使館と海軍武官事務所として使用され、終戦後には接収を受けた。
昭和21年1月、米兵の火の不始末で焼失する。

【参考26】茅ケ崎南湖院

高田畊安の孫の高田準三医師により創設された有料老人ホーム太陽の郷から茅ヶ崎市に寄贈された旧第1病舎。

高田畊安（1861～1945）が設立した結核療養所。1908（M4）年の国木田独歩の入院によって全国に名が知られるようになった。

南湖院の設立は1899(M32)年、茅ヶ崎駅が開設された翌年。
1936(S11)年の敷地は約5万坪、建物は約4,500坪。水道は敷地内の井戸を利用。
水洗トイレと汚水浄化装置を備えていた。
病舎は14舎、病室は158室。砂浜には日光浴場や、座ったり、横臥して外気に接する海気室、外気室が設置され、東洋一のサナトリウムと称せられた。

入院患者に国木田独歩、田山花袋、坪田譲二、八木重吉、平塚雷鳥の姉など。
南湖院を描いた文芸・絵画等：田山花袋“東京の三十年”、真山青果“病状録”、山川方夫“その一年”、中村星湖“彼等は踊る”、萬鉄五郎“南湖院” など。

【参考27】文学作品に描かれた“湘南”

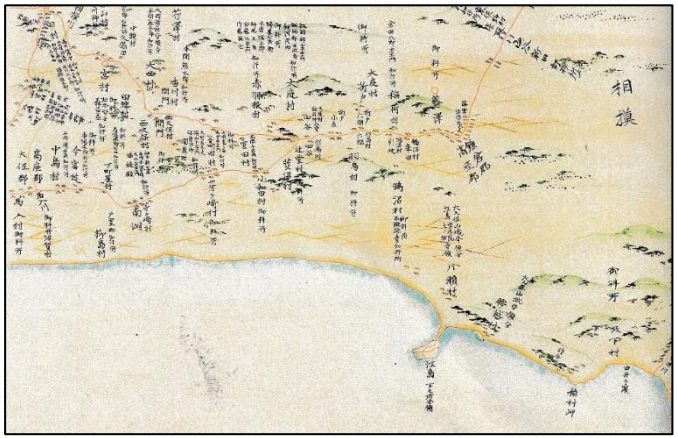
●湘南の地を訪れ作品に表現した例

- ●正岡子規;“大磯の月見”,“大磯に引網を見る記” 他
- ●佐々木信綱;“心の花”に“大磯百首”
- ●徳富蘆花;“不如帰”,“自然と人生” の中の“湘南雑筆”
- ●吉井勇;“酒ほがい”に“夏のおもひで”
- ●夏目漱石;“こころ”に鎌倉材木座海岸や長谷
- ●高浜虚子;写生文“道”は鎌倉駅での観察
- ●谷崎潤一郎;“痴人の愛”に鎌倉、三橋旅館や海浜ホテル
- ●志賀直哉;“鵠沼行”は旅館・東屋が舞台
- ●芥川龍之介;“鵠沼雑記”,“悠々荘”,“歯車”,“蜃気楼” 他

●サナトリウムを作品に表現した例

- ●国木田独歩;“病床録”は南湖院で真山青果が口述筆記
- ●吉野秀雄;“天井凝視”は七里ガ浜鈴木病院での療養詠
- ●岩谷莫哀;“岩谷莫哀短歌全集”は南湖院での療養文学
- ●八木重吉;“作品集”は南湖院での療養文学
- ●田山花袋:“東京の三十年”で南湖院を描く
- ●真山青果:“病状録”で南湖院を描く
- ●山川方夫:“その一年”で南湖院を描く
- ●中村星湖:“彼等は踊る”で南湖院を描く

【参考28】“湘南”は明治以降の新開地



“伊能大図”に描かれた“湘南”の一部。右下に江ノ島。

“湘南”の海岸線のエリア、東から葉山・逗子・鵠沼・茅ヶ崎・大磯にかけての海浜は荒涼とした砂地のために実りが少なく、風や砂の被害の大きな土地であった。

この砂地が近代史上に重要な役割を果たすのは東海道線が延伸し、横須賀線が開通、別荘地や海水浴場が脚光を浴びるようになった明治半ば以降のことである。

海岸線の大部分は新しく開発された土地であり、“湘南は明治以降の新開地”と言える。 島本千也 海浜の憩い/湘南別荘物語

伊能忠敬“伊能大図”の地図に表れた相模湾部（部分）にその地形が窺える。

【引用文献・資料】

161：図：横浜浮世絵,横田洋一,有隣堂,1989（H1）
162：図：不如帰,岩波文庫,1938
https://booklog.jp/item/1/4003101510
風立ちぬ・美しい村,
167;図：図：サザンビーチ茅ヶ崎120周年特集 とことこ湘南
http://www.shonan-sh.jp/pickups/southern-beach-chigasaki/
168;図：海水浴と日本人,畔柳昭雄,中央公論社,2010
172；図：知ってなるほど明治・大正・昭和初期の生活と文化 海水浴の誕生-余暇は湘南の海で-
https://www.jacar.90.jp/seikatsu-bunka
173；図：茅ヶ崎美術館,今月の1点,4月,豊原国周,
https://www.chigasaki-museum.jp/pickup/2018-4gatsu/
174; 図：香朝楼（歌川）国芳「“禱龍館 繁栄之図”1891年出版（大磯郷土資料館蔵） 湘南の誕生,「湘南の誕生」研究会,藤沢市教育委員会
178；図：鎌倉海浜ホテルと逗子でブランチ
https://chifumi-museum.jp/cuty/2016/03/21
179；文（ベルツ）：湘南別荘物語 海辺の思い,島本千也,自家本2000
文：TBアーカイブ-結核に縁の地訪問-高田畊安と南湖院-石川信克
https://www.jatahq.org/pdf/headquarters/document/tb-archive/380.pdf
180;図：フリー百科事典「ウィキペディア（Wikipedia）」南湖院
https://ja.Wikipedia.org/wiki/南湖院
181;図：連載企画～結核に縁（ゆかり）の地歴訪～第5回湘南地方サナトリウム旧跡訪問,島尾忠男/竹下隆夫, 複十No.337,1/2011
https://www.jatahq.org/pdf/headquarters/document/tb-archive/337.pdf
182；図：茅ヶ崎市史ブックレット⑪ 湘南の風景,茅ヶ崎市史編集委員会編 2009
185;図：写真集 茅ヶ崎-きのうきょう-,茅ヶ崎市,1987
188；図：https://shonanjin.com/wp-content/uploads/2016/05/town20141008feelshonan_message_1.jpg
190；図：大磯建物語特別版大磯城山荘,大磯まちづくり会議,2018
文：湘南別荘物語 海辺の思い,島本千也,自家本2000
191；図：横浜浮世絵,横田洋一,有隣堂,1989（H1）
193；図：海辺の思い 湘南別荘物語,島本千也,私家本 2000
文：蕾コレクションシリーズ14,横浜絵,野々上慶一,創樹社美術出版
文：海辺の思い 湘南別荘物語,島本千也,私家本 2000
195；図：古き鎌倉再見その9-「海浜院」について（由比ガ浜）-
https://www.kcn-net.org/oldnew/furuki20.html.
196；文：TBアーカイブ～結核に縁（ゆかり）の地歴訪～「高田畊安と南湖院」～東洋一のサナトリウムと茅ヶ崎」企画展を見て,石川信克
https://jata.or.jp/rit/rj/380-14.pdf
197；文：湘南の誕生,湘南の誕生研究会,藤沢市教育委員会,2005
198；図：伊能図大全第2巻伊能大図関東・甲信越,河出書房新社,2013
文：文：海辺の思い 湘南別荘物語,島本千也,私家本 2000

❖第5話-1 完了